シンポジウム記録 森川里海のつながりを科学で説明できるか？

Ⅲ-1. 流域住民は『森川里海のつながり』を実感しているか？—聞き取り調査とアンケートからみえる自然認識—

長坂晶子

北海道立総合研究機構林業試験場

Ⅲ-1. How local residents recognize the ecological connection from forest to the sea?: Case Study from

Furen River Basin

AKIKO NAGASAKA

*Hokkaido Research Organization Forestry Research Institute, Bibai, Hokkaido, 079-0198, Japan***1. 道東地域で見られる流域連携のうごき**

「森川里海のつながり」といった場合、近年は、陸域から河口域に供給される有機物や栄養塩等の、沿岸生態系に対する正の効果が期待されることが多いが、別の側面として、都市や農業地帯からの過剰な負荷による負の効果もよく知られており、長く流域管理の課題となってきた。北海道東部・風蓮川流域は流域の大半が酪農地帯として開発が進み、下流端に位置する風蓮湖の底質・水質悪化が問題視され、漁業者と酪農家の対立構造が先鋭化した地域ともいわれてきた。しかしこの20年ほどの間に、上流住民（酪農家）が水質改善や保全への取り組みを自発的に行うことで、上下流のあつれきを克服しようという事例が生まれている。

本研究では、こうした動きや考え方を流域全体に広く定着させ、活動を継続していくために何が必要かを探るために、①上下流の住民は自然観を共有しているのか、②流域住民は身近な自然環境をどの程度把握しているのか、の二点について、聞き取りとアンケート調査の結果をもとに考察したので報告する。

2. 上下流住民が語る「地域の自然」

上流住民として酪農家に、下流住民として漁業者にそ

れぞれ直接聞き取り調査を行い、得られた情報をテキストデータ化し解析を行った。出現頻度が3回以上の単語を対象に回答者の居住地と頻出語の対応関係を解析したところ、住民から発せられる「自然」に関する言葉には地域特性があり、まず、上流と下流では語彙がほとんど重ならないことがわかった。さらに上流住民の間でも、語彙の類似度が自治体単位で区別されることがわかり、地域住民の自然認識の空間スケールがかなり狭い範囲であることを表していると考えられた。

3. アンケートから窺える「自然」との距離

上流住民である酪農家に焦点を絞り、「生きもの知識」「自然体験」「流域保全に対する意識」についてアンケート調査を行ったところ、生きもの知識や自然体験を問う設問からは、1950～70年代頃までの自然体験の多様さや地域性を示唆する結果が得られ、とくに、川遊びや釣りなど水辺での自然体験を経験している住民は、「生きもの知識」の量も多く、「知識」と「体験」の関連性が示唆された。一方、風蓮川流域の環境保全のために何が大事か尋ねたところ、「住民の意識向上」、「行政などによる環境保全活動への補助」が多く回答されたが、「知識」や「体験」の内容や多寡はこれらの回答傾向に影響しておらず、むしろ、回答者がどの町（自治体）に居住しているかに影響を受けていた。

4. まとめ

今回の調査では「森川里海のつながり」を実感しているか？という問いに対して肯定的な結果は得られなかったが、①上下流の住民が語る「地域の自然」には共通語が少ない（殆ど無い）、②環境保全意識は、自然条件の違い（生物相や植生、地形など）ではなく、自治体の取り組みなど社会条件の違いを反映している可能性、の二点が示された。現代社会における「つながり」の構築のためには、上下流住民の情報共有のしくみづくり（大きな環）と地域単位でメリットがある取り組み（小さな環）の視点が重要と考えられた。